

たぐみ

Craftsmanship

特集 浜田英峰作陶展

第10号

「伝統工芸品」に指定された 会津三島町山村副業の手仕事

会津の三島町で、山に自生のヒロロ（菅の一種）や山葡萄^{やまぶどう}、マタタビなどを用い、伝承の手法で作られた仕事。「奥会津編み組細工」の名で昨年九月、国の伝統的工芸品産業に指定された。

この三島町もかつては一万をはるかに超える村人が住んで、農業や会津桐の仕事に励み、軒下まで雪の積る厳冬には、晩秋のころ山から採取した草木や藁などを用いて日用の民具などを作るのに余念がなかった。

その後過疎化した三島町では一九七四年から「ふるさと運動」をはじめ、さらに千葉大学宮崎清教授の協力で行った「生活工芸運動」も含めて、こんにち各地町村で行われている同様の運動のさきがけとなったのである。

その折の、ふるさと運動の紹介文にこうある。「三島町は、東京より三二一

^キ、奥会津の山々に囲まれた静かな山村です。春は桜や桐が咲き乱れ、夏は白雲、秋は紅葉、冬は雪、四季それぞれの色を映してゆつたりと流れる只見川と、昔ながらの素朴で温かな人情が息づいているだけのふるさとです。」

そして町を出た人たちや自然と人間性を求めている都会人にも協力を求めて、みんなで町づくりをすすめていこうと「ふるさとを求めている人にふるさとを、三島に住む人に希望と生きがい」とはじめた運動の結実が、今や三島町の人々の誇りとなった、伝承の手仕事の復興であったのである。

この町の産業は決して大きくないが、四季に応じて多岐にわたる。「編み組細工」の仕事も昔から冬場の副業として広く行われたものであった。

いま專業ではない副業の手仕事が伝産品として指定されたことは全国に類のないことであり、今後の手仕事の可能性を示すものとして注目したい。

(志賀直邦)



地釉象嵌ティーポット



地釉象嵌コーヒー碗皿



地釉象嵌スープ碗皿



地釉象嵌小急須二種



地釉象嵌壺

たくみ企画展
浜田英峰作陶展

会期 平成十六年四月十日（土）～十五日（木）
四月十一日（日）は営業いたしません。
会場 銀座たくみ 二階サロン

益子の土地柄と浜田さん

浜田さんが島岡達三先生のもとから独立して、益子の塙はなに窯を築いてもう九年が経つという。

たぐみでの第一回の個展の折り島岡先生も書いておられるが、浜田さんは島岡窯での五年の研修の前に七年の



象嵌赤絵八寸鉢

作陶歴がある。加えてレストラン経営という、器を使いこなす上でのまたとない体験がある。

そういった、社会人として身についた安定感が、浜田さんの作品からいつも受ける心安さに結びついているのだと思う。つまり用に徹した堅実さが身上だが、それとともにどんな料理にも合い、誰にでも使いこなせる穏やかさを感じるのである。

器は料理が盛られてはじめて輝くのである。壺は花が生けられてその所得、茶碗は一服すすめて安らぎを供にする。

浜田さんの作品には、日本の四季の自然とともに在るような静けさがある。それは彼の人柄でもあり、師の島岡先生から学んだものでもあり、そして彼の住む益子の土地柄でもあろう。

濱田庄司、島岡達三、佐久間藤太郎ら益子の土地柄を作品に表現し得た諸先輩に学びながら、自らの道を臆する

ことなく歩んでほしいと思う。

(志賀直邦)

陶 歴

一九五五（昭和三十年）

愛媛県南宇和郡にて生まれる。

一九七八（昭和五十三年）

日本大学農獣医学部農芸化学科卒

一九八二（昭和五十七年）

茨城県にてレストラン経営の傍らアマチュアとして作陶をはじめ。

一九九〇（平成二年）

益子の島岡達三師の門に入る。

一九九五（平成七年）

五年の修業を終え現在地に築窯。

十一月、日本民藝館展初入選。

東京銀座たぐみにて隔年個展・師弟展
神戸阪急百貨店にて毎年個展・一門展
そのほか各地で展覧会を開催。

栃木県芳賀郡益子町塙一三二四

浜田 英峰

砥部の「そば猪口」と祐工さん

瀧田 項一

ボクの修業時代の朋友に阿部祐工な

るご仁がいる。その祐工さんとは正に

「キミは薪木を採れワレは水を汲まん」

とも謂う仲で、益子の濱田窯ではお互い数々の話題を遺した間柄でもある。

いまは北九州の陶房で子息と共に作陶に励む日々であるが、敢えてここに遠い昔に遡ってあの砥部のそば猪口と、くらわんか茶碗の類の食器の再現にその労をついやした祐工さんとの因果関係を改めて記しておきたい。今はもうそれを知らぬ人が多い、激しく移りゆく世代の中で――。

伊予の西条で育った彼は益子での修業を了えて、郷里に戻って築窯独立したのであるが、或るとき砥部の廃業になつた製陶所の売物の話が祐工氏のもの

とへ来たのである。

従業員十三、四名電気の碍子がいでいしの生産を主とした規模の小さな工場である。

もとより柳宗悦の民藝論やウイリアム・モリスの工芸運動に心酔していた

彼は、機械に依る大量生産の食器と、手仕事の器物との接点をどうするか、

つねづね祐工氏の脳裏の中で混乱する課題となっていた。

この小規模な工場はそれらの問題を解くに手頃とも云える構えでもある。

工場の半分を、従来どうり碍子生産を続けながら片方で民藝の理想とする健全やかな日常食器を製産して世に拡めんとロマンの火は高く燃え止に意気軒昂、さらば作るべきものの焦点を何処に合わせるかが問題点となつた。

賢明なる祐工氏は、個人の才能などで即産にいいものが生まれ出ぬものである。むしろ古いものを手本にして、これらの再現から始めんとして有田の染付磁器に狙いをつけた。

そば猪口や飯茶碗はまことに使い易く、形もシンプルで豊富な文様で意匠されて、さすがに江戸期の工人達の生み出した器類である。その良き手本は日本民藝館に在る。それらを忠実にうつすことから第一歩を踏み出したのである。

しかし、新たな仕事には難問題が山積する。祐工さんは益子で土物の陶器作りを身につけた丈けであるから、磁器ともなると全く素材から異なる為工程の上で多くの相違点が出てくるのである。その苦勞はいかばかりか察しがつく、私も駆け出し時代に同じ思いで四苦八苦したものである。

伊万里染付と称される逸品は多くの愛好者の目に焼き付いている鮮やかな



砥部のそば猪口

呉須の色、白い透明なる釉肌、それらに近ずかんとする祐工は骨身を削っての励みであつたらう、しかし乍らそうして窯出しになった品々も当時は充分な受皿となる店も無い頃であつた。

昭和二十九年、三十年戦後の復興も漸く落ち着きを得た程度だつたかも知れない、なにしろ民藝の店は銀座の「たくみ」と荻窪に「いづみ工藝店」大阪に「たくみ貿易」が在る位のもので販路がない。

営業用の器として用いてくれる料理屋も極くわずかであつた。

窯を焼いても品物の捌け口がなく、資金が回転してくれない、その頃はどこでも登り窯を焚く時代である、燃料の松薪の仕入れが莫大な経費となつて覆い被さるのである。

祐工氏は工場の経営に翻弄される日々となり制作の面では鈴木繁男氏の協力を得て製品も格段と向上してきたが、なんとしても世の中の状態が悪く経営も行き詰まり、遂に祐工さんの抱き続けた民藝の理想郷も涙と共に幕を下ろさざるを得なかつたのである。

念の終末といえるが、そのあとを幸にも梅野製陶所が継いでこん日その

「そば猪口」は健やかに続いているのは幸と云える。

ボクは時折砥部の「そば猪口」に出会つたび遙かな昔祐工さんの奮闘したころを想い出すのである。

(日本民藝協会理事)

お詫びと訂正

本誌第八号と第九号に掲載された瀧田項一先生の原稿「その頃の『たくみ』界限」の中に誤植がありました。お詫びの上訂正いたします。

○第八号 四ページ二段目六行

誤 電車通り 正 電通通り

○第九号 三ページ二段目八行

誤 いかばく 正 いくばく

○第九号 三ページ三段目四行

誤 名画喫茶 正 名曲喫茶

昭和九年、高島屋での 現代日本民藝展覧会のこと

昭和のはじめ、柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司たちによつてはじめられた民藝運動も、すでに四分の三世紀を越えた。運動の実践的な責務を担つて発足した日本民藝協会も、今年の六月で満七十年を迎える。

(株)たくみも、昭和八年十二月に銀座八丁目に開業し、翌九年、設立登記をしている。やはり満七十年となる。

これから述べようとする大手百貨店における大規模な現代日本民藝展のことも、これら協会や、たくみの発足と連動したものであった。

昭和六年(一九三二)一月、柳たちによつて雑誌「工藝」が発刊され、地方の民藝の紹介や、かく在るべきこれからの工藝について、まったく新しい視点からの啓蒙が行われるようになる。時あたかも世界恐慌の直後であった。

農村の疲弊、そして満州事変などの対外侵略の代償として、日本は国際的に孤立し、輸出入も激減したのであった。

これらの対応策として商工省は、地方の地場産業を基盤とした輸出向雑貨を開発すべく、ドイツの建築家ブルーノ・タウトを招聘する。

さらに昭和十五年には、ル・コルビジエの弟子であったデザイナ―、シャルロット・ペリアンをフランスから招び、農村の副業振興も兼ねた欧米向商品の試作指導に当たらせたのである。

ここで面白いのは、タウト、ペリアンの二人とも、当時の西欧の商業デザインの傾向に迎合した新製品を真っ向から否定したことである。

ペリアンは日本各地での巡回指導を終えて、地方工人による試作品の展示会に際し次のように述べている。

「あなたたちの、自分で使いたいと思ふものを作りなさい。いま帝国ホテルの地下のアーケードで売っているような、ヨーロッパ人が好みそうだと思ふ手に想像して作ったあの醜悪な品々を、ヨーロッパ人は決して好みません。あなたたちの生活から生まれた技術と材料、それをそのまま生かしながら、ただ用途だけを都会の暮らしに適したように変えればよいのです」

タウトが桂離宮を称賛したことは知られているが、彼が、仙台近郊の農村を探訪して、故郷ドイツの田舎とまったく変らない健康な美しさに満ちていることを、その日記に印象深く記している。またタウトは同じく日記の中で、柳や河井、濱田について、その人柄、見識において屈指の人と記している。

ところで、昭和八年から十八年頃までのおよそ十年の間、柳たちの主な関心は、国内の地方民藝品の発見、調査、集荷、新作指導に集中したといつてよい。そして店と協会という二つの組織



「工藝」第四十七號表紙

の発足とスタッフの充実もあつて、調査活動の成果は、かつてない規模の展覧会の企画と開催へと結実していったのである。

その第一として特筆したいのは、九年の十一月十六日から東京高島屋で開催された「現代日本民藝展覧會」であった。これらの会の準備のために柳たち民藝協会の仲間たちは、昭和八年秋からほぼ一年余りの間、それぞれ多忙な仕事の合い間をぬつて、日本各地の民藝品の調査と集荷の作業に没頭する。柳はまず十二月二十三日から水谷良一、森数樹の両氏を同道して会津探訪の旅

に出る。

このあと暮の二十八日から、さらに河井も加えて九州一円から山陰、山陽地方の、主に陶器の窯元を訪ね正月の八日に帰京する。そして柳は、早くも一月十一日には東北地方の民藝品調査の旅に発たれているのである。

柳たちはこのあとも精力的に全国の民藝調査をすすめ、八月と九月には同人十余人が手分けして九州、近畿から東北地方まで隈なく訪ねている。柳は「工藝」の第四十五号に「既集まるもの総じて五百余种、何れも十一月中旬高島屋で展観する。」と記した。

さて、日本民藝協会とたくみの発足後はじめての大事業であつた、高島屋での『現代日本民藝展』は、出品数、千八百種、一万数千点に及ぶかつてない大展観となつた。柳はこの会について次のように書いている。「十五日から十六日にかけて、夜通しの支度を要した。河井、濱田、吉田璋也、式場隆三郎等上京、それにリ-

子、芹沢、浅野長量、水谷、森、柳、さらに『たくみ』の人々」そして高島屋からは川勝堅二(のちに専務取締役)ほか諸氏が加わり、「ほぼ陳列が終わつたのは十六日の朝六時半頃であつた。」

さらにこの会には、バーナード・リー子設計による食堂、濱田による書齋、河井による台所などのモデルルームが設営され、また山形天童の将棋駒の制作、岩手のホームスパンの糸紡ぎと機織おのり、宮城鳴子の木地玩具のロクロと彩色、栃木烏山の紙漉きの四つを地方風俗のまま実演するなど、近年の百貨店も顔負けのパフォーマンスぶりであつた。

高島屋との協力企画による展覧会はこの後も朝鮮民藝展や信州工藝展をはじめしばしば行われた。そしてこれらの会をとうして失われつつある日本の地方民藝を再発見し、復興した功績は計り知れないものがあつたと思う。

(志賀直邦)

〈秩父からのたより〉

古民家移築再生事業のこと(四)

山下 治

春は弥生となつてしまった。工事の方は、出窓、戸袋、水廻り等へ移り、

進み具合が静かになった。この間、電気工事や板金工事等が入る。電気屋さんには、黒い梁類が多いため黒色のコードを使つてもらつた。コードはほとんど剥き出しである。昔の布着せのコードは今は無く、碍子類のような磁器のものも無いようだ。

そのような訳で、残念ながら我家のものはずべて最近のものである。

照明器具については、以前より集めていた一寸古いガラス製のもの、松本や安来の行灯類を使う。どちらも今は作つていないものが多く、貴重品となつて来た。板金屋さんの仕事でも兩種などは塩ビ製となり、板金で細かい曲

がりの部分などは作らなくても良いようだ。

大工さんの場合は、材料を加工する道具(玄能・曲尺・鉋・ノミ・鋸等々)を使い、職人の巧みな仕事美しい建物を作り出す。古くから「材に美有り、工に巧有り」と言われている。今は電動工具も増えているが、これらが職人の手の延長となり、プラスチックの職人魂も加わり、美しく繊細に、そして力強く作つてゆく。

現在家作りの世界は、ツーバイフォー・プレカット・メーカーハウス等が在来工法住宅を席捲しつつある。

後継者、技術の修得、材料など、家作りと民芸の現在は重なっている。大袈裟に言えば「日本の文化」は、

諸職の技術と共に、家作りから減びてゆくだろう。

そのような訳で、家作りを進めてゆきながら、後継者の事が気になつていたが、我家作りの廻りでは若い人達が目立っている。設計の堀口剛君をはじめ、この度の旧小林邸を最初に調査し、私共が知るきっかけとなつたのは、持主の姪の山崎サチエ・智仁夫妻と友人の清水徹の三君で、共に新潟を中心に活動している若い建築家達である。

七代続いている親方家も、八代目の長男(大野純)君が、この程一級建築士に合格した。我家の小笹棟梁も息子さんが継ぐべく勉強中であり、電気屋さんも板金屋さんも息子さんと二人でやつている。私自身も職人の倅ながら、親の仕事は継がなかつたため、これらの若い人達には、心よりエールをおくりたい。

工事開始以来毎日現場に通い、掃除や柿渋塗りなどをしてしているが、大工さ

んにとつては邪魔であろう。

しかし、現場の話し合いで進める仕事も多い。旧家の天井で燻されていた竹材も、磨いて一部の天井材として使うことにした。

仕事が進むにつれて、現場の廻りに置いてある古材が、だんだん減って淋しくなる、古材は忙しく洗って大工さんに渡す事もある。

芹沢銈介の絵物語について(三)

『極楽から来た』

昭和三十年代以後の芹沢銈介の物語絵の中で、もつとも人気を博したのは「極楽から来た」である。この物語は佐藤春夫原作による小説で昭和三六年六月から半年間、芹沢による挿絵とともに朝日新聞朝刊に連載されたのである。

物語の主題は法然上人の一代記であ

古い床材については、金ブラシ、タワシ、雑巾等で水洗いし、洗面所と手洗いの腰板や天井板とした。

居間は、樺の七寸柱と尺三寸の差鴨居に囲まれた、立派な部屋で、差鴨居は上下に戸走りが刻まれている。昔の再生時にひっくり返して使った事が窺える。この部屋の半柱が面白い。

今は建具の掃除をやっている、障子

志賀直邦

つて、その点「法然上人絵伝」と同じだが、佐藤が「真平家物語を書いたつもり」と自ら記したように、単なる伝記にとどまらず、平安時代末期、源平合戦を背景とした一大絵巻といつてもよい作品であった。

そして「絵伝」が合羽摺であったのに対して、これは型絵染の手法による表現であることもあって、より各図

は古い糊が仲々落ちない。ガラス戸も多く、古い模様ガラスも美しいものがあり、先が楽しみだ。

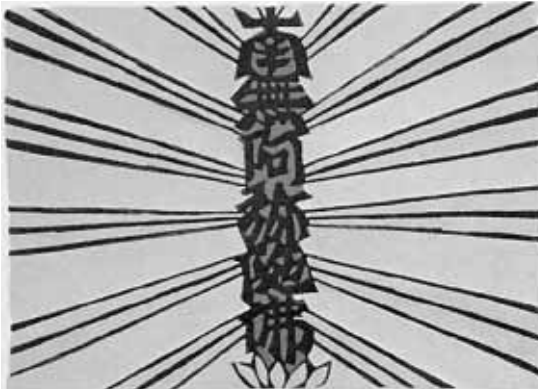
最後に「たくみ誌」の貴重なページに、私の駄文を使わせていただき、恐縮しているところですが、もう一回で終わる予定です。志賀社長さん、スタッフの皆さん深謝です。

(秩父民具の会)

に特色が出て一七三図すべてにあきることがない。

しかも時代相も含めた物語性は、法然の生い立ちから修行、そして浄土の大宗を建てるに到るまでの足跡をまことにわかり易く記している。ここでこの物語のあらすじと法然の足どりについて記そう。

時は平安時代の終わり頃、朝廷や藤原氏などの貴族、寺院など権力抗争に明けかれて、地方の豪族たちも所領の争いに心の安まる時とてなかつた。



南無阿弥陀仏

一一三三年、美作国（岡山）稲岡庄の名家漆間氏に一人の男児が生まれた。これが勢至丸である。所領の争いで父の時国が明石定明の夜襲にあい生命を落としたあと、勢至丸は寺に預けられ、やがて比叡山で修行することになる。

その頃、天台、華嚴、真言の各宗派

は教義論争や勢力争いに日を送り、延暦寺も山法師と呼ばれていた。勢至丸は学僧皇円のもとで三年の修行ののち黒谷の叡空の門に入り、法然房源空という名を許される。法然はその後参籠、修行を重ねるもなお人々を救う道の遠きを悩み、南都（興福寺）からさらに各地を転々として遊行をつづけるのであった。

世情はといえば、鳥羽上皇と崇徳上皇の不和をきっかけとして保元の乱がおこり、源平争乱の幕開けとなる。その後平治の乱がおきて源義朝が敗れ平家の天下となる成り行きについても、多くの挿話をとりまぜ物語はすすむのである。

そのあらずじを、芹沢の挿絵集の題名から追ってみよう。

「源頼政」「宇治川の戦」「諸国に源氏起つ」「古都は荒れ、新都（福原）未だ成らず」「維盛富士川の敗走」「大仏殿炎上」「平氏の都落ち」「安徳天

皇」「義仲主従」「壇ノ浦」「源義経」

「維盛入水」

「祇園精舎の鐘の声」「清水の説法」

「大原問答 龍禅寺」「法然上人源空像」「一枚起請文」とつづいていく。

さて、法然は十年もの彷徨、修行ののち黒谷に戻り常座三昧の修法に入る。ある夜法然は、夢の中に唐の高僧善導が現れて、専従念仏の道こそ本願への正しい道であることをしめされる。

時あたかも源平争乱と打ちつづく飢饉によつて庶民は貧苦の底にあつた。飢餓と疫病による死者はおびただしく、ある年、都だけでも屍体数千を河原で焼いたといわれる。

日々の暮らしに安寧はなく、百姓、地侍は時に悪党とよばれ、山人や漁師は生物殺生の罪に怯え、遊女、非人もまた極楽往生の望みとてなかつた。

そのようなときに、南無阿弥陀仏の六字の名号をひたすら称えるという専従念仏によつて、善人、悪人を問はず



法然上人源空像



保元の乱

すべての凡夫にも阿弥陀の慈悲が与えられるという悟りを、法然が得たことは画期的なことであった。

法然が道を見出したと聞いて悦び、高倉天皇を受戒させ、そして東山の吉水に法然を住まわせる。吉水の法然のも

とには熊谷連生（次郎直実）や親鸞などが集まり、専従念仏の道に入ったのであった。

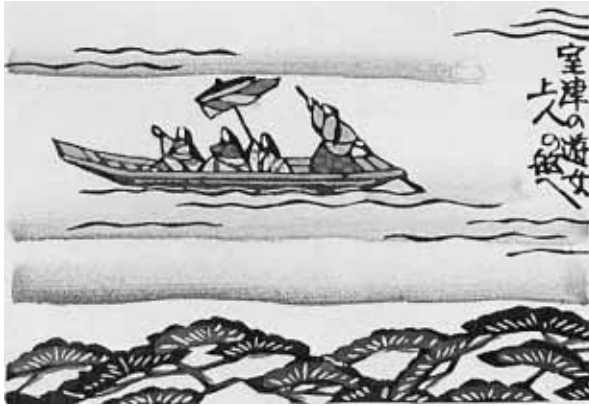
しかし平家滅亡によって力を盛り返した南都北嶺の大寺院は、法然らの専従念仏が旧来の仏法に反するとしてその停止を朝廷に要請したのである。そ

して法然は塩飽島へ配流と決まり、親鸞もまた越後に流されたのであった。

法然配流の道中の室津では、遊女たちまでが舟をこぎ寄せて法然を迎え、拜むのであった。この室津の遊女の話は知恩院本の絵伝にもあつて知られた話だが、漁夫や遊女をはじめ名もなき皈依者が各地に法然を迎え、専従念仏の教えは次第に広まつていった。

ところで親鸞は日野有範の息子、幼時より天粟を現したという。八歳にして比叡山に上り範宴と名乗った。関白九条兼実にあわれ、息女玉日姫を妻としたという。その後法然の門に入り、越後配流ののちも東国にとどまり、小庵を結びながら布教に生涯をつくしたのであった。

因みに法然の立てた一宗は浄土宗、本山は知恩院、増上寺など。親鸞のそれは浄土真宗と称し、東西の本願寺や高田派の専修寺など全国に数多くの寺院、門徒がある。



室津の遊女 上人の船へ

こんにち、平安末期と同じく戦いと欲望と、そして世界の圧倒的多数の人びとの貧困とが、解決の手立てのないまま見過ごされている。自然科学や社会科学だけでは必ずしも明らかにしえない人類の未来像、そして人びとの求

める心の救いについて、いま深く考えないではいられないのである。

いま、世界の宗教の墮落と権威化、そして他方で現実を無視した原理主義的傾向の危うさを目にするとき、法然、親鸞の、自らを凡夫と認じた上での厳しい修行と、その上での「南無阿彌陀仏」の念仏への帰依の尊さを思う。他力道もまた、深い苦悩の上での信心なのだと思えるのである。

さて、芹沢本挿絵集「極楽から来た」は、昭和三十六年(一九六一)七月、一七三図型絵染、表紙しづぎ染にて、限定一五〇部が吾八から刊行された。物語の各場面、あるいは宗派の門徒にとつて、悟りに到る大切な意味をもつ絵や六字名号など、刊行のあとも再摺りされたものも多く、芹沢の作品中もつとも人気の高い一集である。

(つづく)

あとがき

陽春というにふさわしく陽ざしも風も爽やかに、目には青葉、の季節となりました。

そういえば去る二月一日、会津三島町での伝産品指定の祝賀会に出席した折り、斉藤町長や経済産業省の庄野室長、全国伝産協会の渡辺会長たちの歓談で、只見川に沿って奥会津を横断する只見線沿いの景観の、四季折り折りの美しさがひとしきり話題となりました。

春の新緑と桜、秋の紅葉、このたとえようもない美しさは、都会にいては想像すらできないものでしょう。

世界でも恵まれた日本の自然と、ここで生まれた地域文化の多様性を大切にするこゝとなしに、私たちの未来はないことを深く感じたことでした。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八丁四一
二 発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七
FAX 〇三―三五七―二一六九
振替 〇〇―一〇二―三五六五九
定価 六〇円(税込)